

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	三島 菜乃 (みしま なの)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	修士課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2022 年 12 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 29 回日本行動医学会学術総会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	三島菜乃, 田島えみ, 畑琴音, 鈴木伸一
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	大学生における主観的認知機能尺度の作成と信頼性・妥当性の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>【背景・目的】現在、多くの認知機能検査が開発されているが、検査に熟練した専門職が必要な場合や、測定や解釈に時間を要することがある。そのため、認知機能を簡便に測定できるツールの必要性が指摘されており、自記式の質問紙が開発されている (Lai et al., 2011)。しかし、健常者を対象とした場合、認知機能の 1 側面のみを測定する質問紙が多く、認知機能を網羅的にできる質問紙は開発されていない。そこで本研究では、認知機能の各領域を包括した主観的認知機能尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。</p> <p>【方法】大学生 219 名 (男性 70 名, 女性 145 名, その他 3 名, 無回答 1 名; 平均年齢 20.7 ± 2.14 歳) に質問紙調査を実施した。質問紙は、性別, 年齢, 学年, 暫定版主観的認知機能尺度 40 項目, 大学生用適応感尺度 (大久保・青柳, 2003), The Patient Health Questionnaire-9 (以下 PHQ-9, Muramatsu et al., 2018) で構成した。本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て実施された (承認番号: 2022-154)。</p> <p>【結果】尺度項目の項目分析を実施した後、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、28 項目 3 因子構造が妥当であると判断した。下位尺度の α 係数は 0.78–0.89 であった。3 因子は、それぞれ「記憶と集中力」、「図や空間の把握力」、「複数の作業の遂行力」と命名した。次に、PHQ-9, 学校適応感との外的妥当性を検討した結果、PHQ-9 と主観的認知機能尺度の下位因子および合計得点に有意な負の相関関係が認められた ($r = -.51 \sim -.26, p < .01$)。また、学校適応感においては有意な正の相関関係が認められた ($r = .18 \sim .52, p < .01$)。</p> <p>【結論】本研究で得られた因子は、認知機能検査として用いられる、ウェクスラー式知能検査の 4 つの指標の概念を網羅した因子であることが想定される (日本文化科学社, 2018)。また、PHQ-9 および学校適応感との関連は、先行研究の結果と一致している (Norvilitis et al., 2010; Park et al., 2015)。以上のことから、主観的認知機能尺度は、一定の信頼性と妥当性を有する可能性が高い。今後、認知機能検査を用いた構成概念妥当性の検討を進めるとともに、大学生以外の集団への調査が求められる。</p>	

※無断転載禁止